

【地域体験活動②】
琵琶湖に浮かぶ「人が暮らす島」へ
2026年9月19日(土)

滋賀県
子ども県議会
事務局発行 / No.4



すまいる・あくしょん公式キャラクター
「にじはび」



9月19日(土) 子ども議員たちは近江八幡市の沖島を訪れました。沖島は、琵琶湖に浮かぶ島で、実際に人々が暮らしている離島です。今回の地域体験活動では、島を歩き、漁師さんや地域の方のお話を聞きながら、「琵琶湖とともに暮らすって、どんなことだろう?」と考えました。観光で訪れるだけでは分からない、島での暮らし、漁業、地域の歴史、人と人とのつながり。実際にその場所へ行き、見て、聞いて、体験することで、沖島の「今」に触れていきました。

船に乗って、沖島へ



堀切港から船に乗り、いよいよ沖島へ向かいます。船が港を離れると、いつもは岸から眺めている琵琶湖の上を進んでいきます。少しずつ沖島が近づいてくると、子どもたちからは「思っていたより近い!」「島、大きい!」という声も。船から見える島の景色を眺めながら、沖島へと渡りました。島に到着すると、今回島を案内してくださる沖島町離島振興推進協議会の本多さんと出会いました。また、滋賀県市町振興課の職員さんから、沖島での暮らしを実際に体験する「おためし離島留学」の取組についても紹介いただきました。

新しくなった沖島漁業会館へ

今回の活動は、改修工事を終えたばかりの「沖島漁業会館」をお借りして行いました。中を見学させていただき、この場所がどういう場所かも本多さんからお話を伺いました。



沖島を散策



沖島に到着した後は、本多さんに案内していただきながら島を歩きました。散策の途中、「今歩いている場所も、昔は琵琶湖だったんだよ」と教えていただきました。昔は家の近くまで湖が広がり、今も残る石段から湖へ下りることができたそうです。その後、洪水から暮らしを守るため、水位調整や湖岸整備、埋め立てが進み、島の風景も変わりました。一方、かつては琵琶湖の水が田んぼへ入り、魚が産卵して湖へ戻るなど、水と生き物の命がつながっていました。昔の湖岸の跡と今の風景を見ながら、「暮らしの安全」と「琵琶湖の自然」について考えました。

人口減少や空き家、獣害など、沖島が抱える課題についても聞き、島の昔・今・これからを考える時間になりました。

3人の話から考える、沖島の「今」と「これから」



島を歩いた後は、前漁業組合長の奥村さん、地域おこし協力隊の平尾さん、そして本多さんから、それぞれの立場で沖島の暮らしやこれからについてお話を聞きました。

奥村さんからは、長年漁師として琵琶湖と向き合ってきた経験をもとに、琵琶湖の環境と漁業の変化について聞きました。かつて湖岸に広がっていたヨシや水草が減り、水質の変化や外来魚の増加などによって、昔からいた魚も減少。漁師にとって魚が減ることは、そのまま暮らしに関わる大きな問題です。魚を人工的に増やす取組や外来魚の駆除など、さまざまな努力を重ねながら、現在の琵琶湖へつないできたことを教えていただきました。

平尾さんからは、地域おこし協力隊として島で活動する中で感じる沖島の魅力と課題について聞きました。島の人にとって当たり前の自然や漁業、人の温かさ、歴史ある暮らしも、外から来た人には大きな魅力に見えること。一方で、船の担い手不足や空き家、仕事、移動など、暮らし続けていくための課題もあります。島外の人にも沖島を知ってもらい、一緒に地域を支える人を増やそうと活動されています。

本多さんからは、島には車がほとんどなく、移動には船が欠かせないことや、買い物やごみ出しなど、島ならではの暮らしについて聞きました。また、子どもの減少が進む中、沖島小学校では島外から通う子どもたちを受け入れる取組も続けられています。

自然や漁業、人のつながりがある沖島を、これからどう残していくのか。三人のお話から、島の魅力だけでなく、そこで暮らし続けるための課題についても考える時間になりました。

